

野外調査から隕石研究まで ブライアン・メースン自伝(第3回)

ブライアン・メースン¹⁾, サイモン・ネーサン²⁾ 著
河内 洋佑³⁾ 訳

石油探査

1936年に新たに政権についた労働党は、海外の会社が国内で石油探査をすることを奨励する石油探査法を制定した。この法律に基づいて早速バキュームとシェルの両社が探査を開始した。シェルの子会社として、ニュージーランド石油探査(NZOE)という会社が設立され、ウェストランドと北島の中央部を探査する権利を与えられた。地質専門家を求むという広告に応募した私は採用され、1938年11月からウェストランドのホキチカを根拠に仕事をすることになった。かつてダンネパーク図幅で一緒に仕事をしていたことのあるデーブ・ブラウンがパーティのリーダーになった。彼は地質調査所を退職して少し前にNZOEに移っていたのである。

私は愛車のオースティン7を駆ってアーサーズ・パス峠を越え、ホテル・ウェストランドに居を構えていたデーブ・ブラウンのところに行った。当時このホテルはホキチカで一番上品と言われているホテルだった。しかし、正面から見るとたしかに立派に見えたが、両脇と後ろの壁は波状トタン板でできていた。このころホキチカには少なくとも20軒のホテルがあった。

チーフ・ジオロジストのクリーク博士から出された指示によると、私たちの仕事はウェストランドの第三紀層について基準になる層

序を確立せよということだった。地質調査所の古い報告や地質図を調べた結果、デーブは第三紀層下部についてはグレイマウス付近に露出しているコブデン石灰岩を含む断面がよいだろうという結論を得た。

第三紀層下部についてはここで俗称‘ブルー・ボトム’と呼ばれている塊状で青灰色の泥岩の露出しているエイトマイル・クリークの断面を調べることになった。私たちは断面を測定し、有孔虫を抽出するための微化石を含むサンプルを採集した。こうして私たちは天気が良いときは野外調査をし、悪いときはオフィスにいて図面の整理をすることになった¹⁴⁾。



第16図 愛車オースティン7。ポーターズ・パス峠の雪中をチェーンをつけて越える途中。私はこの車でNZ中を見て回った。

1) 米国スミソニアン自然史博物館
National Museum of Natural History, Smithsonian Institution :
Washington, D.C. 20560 USA

2) ニュージーランド地質核科学研究所
Institute of Geological and Nuclear Science :
P.O.Box 30-368, Lower Hutt, NZ

3) 〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-16-2-408

キーワード: ブライアン・メースン, 伝記, 地球化学



第17図 ホキチカ周辺で石油を探索しているころ、1938年12月。左よりブライアン・メースン、ブライアン・ハーラン(NZ銀行)、デーブ・ブラウン、アーチャー・ブラウン(ホテル・ウェストランド)。

1月になって私はウェリントンの本社から、北島のタウマルヌイに転勤するという通知を受けた。会社はタウマルヌイからピピリキに至る広大な地域の探鉱権を獲得していたのであった。私は夜行列車で午前3時にタウマルヌイに到着し、経験豊かなジャック・ウーリーの下で働くことになった。彼はかつてボルネオで働いていたのだが、そこで鱈に噛み付かれたときの腕の傷を自慢にしていた。

私たちは食事つきの下宿屋住まいだった。しかしそこはあまりよい宿ではなかった。ジャックには朝食のとき初めて会ったのだが、彼は「この国には石油なんか出ないよ。石油が出るには景色がよすぎるから」と言った。

ワンガヌイ川を下る

この地域では露出を調べたいと思ったらワンガヌイ川に沿ってボートで近づくしかなかった。ジャック・ウーリーはワンガヌイ川とその支流を調べる

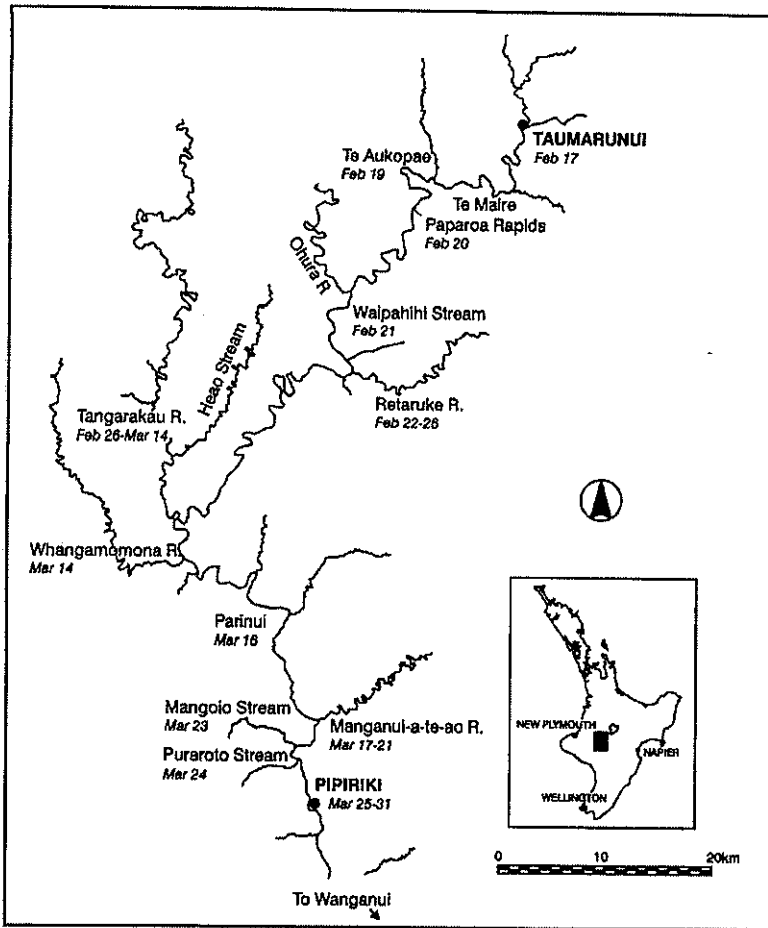


第18図 オフラ滝の下でボートと。右手前にブラウニー。

長い調査旅行のためにボートを作らせており、ガイドとして現地のマオリ族2人をやとうことにしてあった。私は彼が不在の間、事務所の番をするはずだった。しかし、出発の朝になって彼は急病になり、医者から出発を禁じられてしまった。ウェリントンの本社に電話してクリーク博士と相談した結果代わりに私が行くことになってしまった。

これは予想外の展開だった。私はこの地域についてほとんど何も知らないのにワンガヌイ川調査のリーダーにされてしまったのである。ボート、二人のマオリ族の助手(二人とも私より年上だった)、それにはかなりの量の食料(主にたまねぎ、じゃがいも、それに米だった)が渡された。ライフル(22口径)もあって、途中で大部分の食料を自分で調達することになっていた。これは若造にとっては大変な重責だった。助手だったのはジョージ・ワハバとミタ・ホカイロの二人だったが、ジョージはワンガヌイ川でフ

昔からグリーンストーンとニューリバー川で砂金をとっていると青色の方ソーダ石の入った特徴的な閃長岩の礫が見つかることが知られていた。1938年NZOEで働いている間に私はグリーンストーン川にいた鉱山師から10kgくらいあるこの珍しい石の塊を手に入れた。この石を磨いたものはカンタベリー大学と博物館に寄付してある。この岩石はおそらくホホヌ山脈から流れてきたものなのであろう。私は何度も探してみたが結局原産地は分からずじまいだった。化学分析¹⁰⁾によるとこの岩石は極度に分化したマグマ起源で、MgOをほとんどまったく含まず、CaOの含量も極めて低い。



第19図 タウマルヌイとピピリキの間のワンガヌイ川上流部略図。

ァカホロとタウマルヌイの間を航行していた蒸気船の船長だったし、ミタはアングリカン教会の牧師をしていたこともある人だった。出発するときになってジョージの犬、ブラウニーが遠征に加わるようになった。この犬は、本当はタウマルヌイに残るはずだったのだが泳いで船を追ってきたので、助け上げたのであった。

ワンガヌイ川は柔らかい第三紀層に深く切り込んだ流路を持っている。その岸はところによっては100m以上もある崖になっており、両岸は降雨林に覆われている。この遠征のために特注されたボートは平底船で、長さ5.3m、幅は1.6m近く、最大喫水はおおよそ15cmだった。この船は6週間の川下りについては適していたが、沈水木の多い支流を上がっていくにはまるで扱いにくい厄介者だった。このとき私たちが通った経路は、最近ではタウマル

ヌイとピピリキの間の主な支流上りを含む90マイル(144km)に及ぶカヌー旅行の標準コースとして人気がある。しかし当時これは相当な冒険だった。当時の日記を後で少し引用するが、それを見ればどんな旅だったのかを想像してもらえらるだろう。この旅行の後私はタウマルヌイの周辺で1ヶ月半ほど仕事をし、ラエティヒに移った。私は8月の終わりに会社を辞めた¹⁶⁾。クライストチャーチに戻った私は大至急で地質の修士論文を書き上げ、11月初めに修士試験を受け、1939年11月半ばに大学の卒業生奨学金によるノルウェー留学のために旅立った。

1981年になってから、弟のアラン、甥のジョージ・メースンと3人でタウマルヌイからピピリキヘカヤックを使って旅してみても、往事をしのんだものである。



第20図
アウコパエの下の川岸キ
ャンプ。1939年2月19日。

ワンガヌイ川遠征-日記の抜粋

2月17日金曜日

タウマルヌイ発3時。ハーリヒ・ブラフの下とその少し下の急流でボートを運びおろさなければならなかった。テ・マイルの少し上流で7時にキャンプ。うなぎ取りを試みて8匹くらい捕まえた。就寝11時半。

2月20日月曜日

パパロア・ラピズ(訳注。ラピズは急流)で昨日昼食を取った際、斧を忘れたことに気づき、ミタが歩いて戻って取ってきた。ミタを待っている間にウサギ数匹を仕留めた。朝食でうなぎを食べてしまったので、ウサギが捕れたことはよかった。

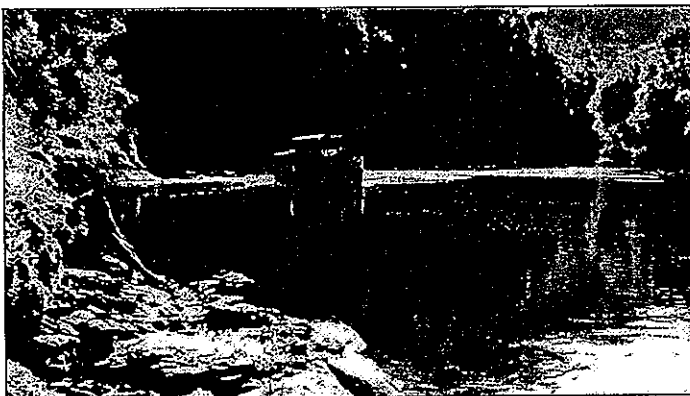
2月21日火曜日

9時半ごろ出発。天気よし。支流のワイパヒヒの合流するところの対岸で塩分を含む冷泉(ワイトテという名前)を調査。レタルケ川に11時半着。ちょう

どオンガルエ川のフェリーが棧橋を出るところだった。ラスリング農場にお昼ごろ到着。ジャック・ウーリーに電話して食料若干、キャンプ・オープン(訳注。鉄製の厚い深鍋で野外でパンなどを焼くのに使われる)その他を持ってきてくれるよう依頼。彼は4時ごろ到着。1時間ほど詳しく話を聞いた後帰る。川岸の平地にキャンプ。

2月22日水曜日

天気晴朗。朝のうちにレタルケ川をキャンプまで調査。午後本流を2-3マイル調査。午後の調査にはアンダーソンのカヌーを借りた(アンダーソンは当時ピピリキとレタルケとの間を航行していたフェリーのオンガルエ号の船長だった)。本流を2-3マイル下ったところで、遡上してくるオンガルエ号に会った。オンガルエ号に乗せてもらってレタルケに戻り川岸でキャンプ。



第21図
ワンガヌイ川を航行するフェリーの
オンガルエ号。1939年2月22日。



第22図 タンガラカウ川の沈水木。こういう木があちこち
にあって航行には時間がかかりまた危険だった。

2月23日木曜日

非常に面白い地質だったので、あまり距離は稼げなかった。キリキリロアでキャンプ。流木が山のようにあったので、夕方のキャンプファイアーを盛大に燃やす。

2月24日金曜日

7時半起床10時半発。6時半キャンプ。晴天。夕方鳩が捕れたので、うまいシチューができた。

2月26日日曜日

ゆっくり起床。レタルケ測量地域の地質図を清書。そのため出発は11時半になった。今日も晴天。タンガラカウ川の川口で6時15分キャンプ。

2月27日月曜日

7時15分起床。クリーク博士宛の手紙を2時間かけて書く。タンガラカウ川調査の地形図を準備。空のボートでワングヌイ川を下り、12時45分にキャンプの下4マイルのところではレタルケに戻るオンガルエ

号に便乗。船のクルーといろいろ話した。パンとジャムを分けてもらう。2時半にキャンプをたたんでタンガラカウを遡る。1マイルほどあがったところで5時45分にキャンプ。沈水している木で大変だった。

2月28日火曜日

ジョージとミタが木を処理している間に支流の地質を若干調べる。

3月1日水曜日

すばらしい好天。一日かかって引っかかっている木を片付けボートを引っ張り上げる。ヘアオ川の合流の4分の3マイルほど下流のところまで6時半キャンプ。最後の肉だったベーコンを盗もうとしていたブラウニーを見つけた。菌型がちょっとついただけでベーコンは助かった。

3月2日木曜日

肉なくなる。うなぎも食べ飽きたので、マオリの助手たちは鉄砲を持って野生化した豚を捕まえに行った。その間私はヘアオ川調査を開始。1マイル上流で難しいゴルジュに遭遇。回り込むのに1時間もかかる。およそ半マイル上がったところで野生化した牛の群れに会って危険を感じたので戻ることにした。キャンプ着4時半。

3月3日金曜日

ジョージ、ミタと3人で蚤刀を手に9時に出発。昨日野生の牛の群れに遭った付近でジョージが1頭を仕留めた。「ちょっとした藪」を猛奮闘で切り開いた末にやっと1マイルほど上流に到達し1時に昼食。昼食後マオリの人には帰ってもらって一人で滝まで行ってみる。帰りには藪を切り開いて通りやすくしておく。牛を解体して肉にし、キャンプ帰着7時10分。

3月5日日曜日

午後ミタが野生の豚1頭を仕留める。かなり進んだが棘のある蔓つるに悩まされる。かなり遅くなるまで帰りを延ばしたためキャンプ帰着は日没後30分の8時20分になった。

3月6日月曜日

キャンプを上流に移す。昼食後私は地質調査。調査中に雄牛2頭に襲われて木に登って逃れた。

3月7日火曜日

7時に起きた。寒い朝だ。霧が深い。キャンプ発8時半。ウル道路の上で昼食。上流へ行く途中また

牛の群れを避けて木に登る。7時45分キャンプに戻ってみたら、食料は完全に蠅にやられていた。蛆だらけの肉のかなりの部分を切り捨ててやっとなしに食事には足りるだけの肉を回収。

3月8日水曜日

テントのフライだけを持って重い荷物を残して10時40分出発。ヘアオの第1キャンプで食事、休憩。ベースキャンプ着6時15分。非常に疲れた。

3月9日木曜日

ひとつしかないズボンなのに焚き火で乾かしているとき誤って穴を開けてしまった。仕方がないので、出発を延ばして補修。ジョージは川の流れをせき止めていた大きな木を切断することに成功。ミカはパンを焼いた。タンガラカウ川を上流に向かって調査開始。ジョージが邪魔な木を切断している間に、歩いて進む。帰途川に転落。キャンプ対岸に野生のヤギ数頭が出現。しかし、銃を取るのが遅れて全部を逃がす。

3月10日金曜日

夜中から早朝にかけて雨、そのため8時まで起床せず。うなぎを1匹捕まえたので、朝食はうなぎとフライド・ポテト。沈水木に大いに悩まされたが地質は単純。レタルケを出て以来、初めて開けたところに出る。

3月11日土曜日

土砂降り。マオリの人々は狩猟に出、私はキャンプで地図の清書。マオリ族の人が鳩を2羽仕留めてきたので、夕食は鳩のシチュー。午後から夜にかけてさらに雨。テントは雨漏りせず快適。日中飛行機の音がしたように思う。

3月13日月曜日

ジョージは狩猟、ミカはパン焼き、私は調査。昼食後出発は2時5分。下流に下がる途中無人になった農場を見つけ、桃、にんじん、ジャガイモ、その他を頂戴する。豚の仔が捕れたので夕食は豚の丸焼き—最高。ヘアオのベースキャンプ着7時。

3月14日火曜日

タンガラカウからワンガヌイ川まで問題なく下る。タンガラカウ川は私たちが入山したときより18インチ(約46cm)水位が上がっている。さらに下流に向かって航行、途中でピピリキに向かうオンガルエ号に出会う。手紙を受け取り卒業生奨学金がもらえたことを知る。ファンガモモナ川の合流より下流1マ



第23図 ミタとジョージがキャンプ・オープンで焼いたパンを見せているところ。

イルでキャンプ。

3月15日水曜日

8時起床10時出発。もう少し早起きして早く仕事を始めるようちょっとした説教を垂れる。オタイムンガでオンガルエ号に会い、私の時計は午後1時を示しているのに本当は11時半であることを知る。もっと早起きするようにという私の説教を撤回。ポートから食料を補給。特にフレッシュなパンがありがたかった。暗くなって7時半にタンガホエ川でキャンプ。

3月17日金曜日

朝のうち衣類の洗濯、その他で過ごす。ジョージが誤って料理用の油脂を全部川に捨ててしまう。非常に残念。午後2時にキャンプをたたみ、日没後30分経った7時半にマンガヌイーアーテーアオ川の川口にキャンプ。

3月18日土曜日

10時にマンガヌイーアーテーアオ川を遡る調査開始。2マイル上ったところで古いマオリ村跡にキャンプ。夕方銃弾1発とポケットナイフで豚5匹を捕る。ロースト・ポークを堪能できる谷だ。

3月19日日曜日

村の跡へ行ってみていくつか梨をもらってきた。急流多数でポートを引っ張り上げた末3マイル上流でキャンプ。

3月21日火曜日

朝雨のため9時まで起きなかった。洪水になるかも



第24図 ヘアオ川で捕った野生の豚とポーズをとるジョージとミタ。

しれないのでマンガヌイーアーテアオ川を脱出したほうがよいと考えて10時にキャンプを引き払う。日中しばらく豪雨。川くだりの途中、古いマオリの村跡で豚1匹、ガチョウ1羽を捕る。5時に本流に出た。

3月23日木曜日

快晴。本流を下る。マンガイオの直ぐ下で昼食。ガチョウの残りを食べ終わる。昼食をとっているときウェリントンから来た2人の人の乗ったボートが下ってくる。彼らはテ・マイルからワンガヌイへ行く途中とのこと。彼らはワンガヌイ川をボートで下るのが我々の仕事と聞いて大変うらやましがった。

3月24日金曜日

朝のうち歩いてプアロト川を遡って調査。野生の豚多数を見る。当歳の仔豚2匹を捕る。午後はピピリキ凱旋に備えて、髪を切ったり、ひげを剃ったりなど、身なりを整えることに過ごす。

3月25日土曜日

キャンプを撤収。ピピリキには午後遅く到着。ウーリーに電話したところ、ワンガヌイまで調査しなくてよく、そこまでで中止という指示を受けた。

3月26日日曜日

朝のうちにフェリーで昨日寄れなかった鉱泉数ヶ所を見に戻りサンプル採取。

3月27日月曜日

朝クリーク博士とジョージとミタに払う賃金のことで電話で話す。ピピリキ周辺の地質を調査。

3月28日火曜日

ピピリキ周辺の地質を調査。

3月29日水曜日

ジョージと一緒にフェリーで7時発。アンディーのカヌーを使ってマンガイオ川を調査。川口通過は容易ではなかった。途中何度もカヌーを運ばねばならなかったが数マイル進んだところでキャンプ。

3月30日木曜日

荷物を降ろして空にしたカヌーをしばらく上流まで運んだが、あきらめて徒歩で次の支流の合流まで進む。帰り道でキャンプを撤収し、ピピリキまでそのまま戻った。完全に暗くなって8時半着。

3月31日金曜日

ウーリーが昼ごろ到着。最後のキャンプをたたんで、タウマルヌイに夕食前に帰着。

原注

- 14) D.A. Brown (1940) Geological report on the Westland area (New Zealand Oil Exploration geological report 14). Institute of Geological and Nuclear Sciences petroleum report PR1.
- 15) メースンによる次の論文がある。Sodalite syenite from North westland. Geological Society of New Zealand Newsletter 77: 28. (1987).
- 16) NZにおける石油探査の報告の原文はNZ地質核科学研究所で見ることができる。

(a) Mason, B. H. 1939: Report on a reconnaissance survey of the Wanganui River, Taranaki geological survey (New Zealand Oil Exploration report). Institute of Geological and Nuclear Sciences petroleum report PR15.

(b) Wooley, J. B. 1940: Geological report on the Taumarunui area (New Zealand Oil Exploration report). Institute of Geological and Nuclear Sciences petroleum report PR2.

MASON Brian and NATHAN Simon (2002): From Mountains to Meteorites (Part 3). [Translated into Japanese by KAWACHI Yosuke].

<受付: 2001年11月25日>